



### 中国がわかるシリーズ15

#### 魏の建国から晋による統一へ

ライフネット生命株式会社

代表取締役会長兼 CEO、出口治明

220年の魏の建国は、当時の一大事件でした。漢の武帝が国教とした儒教は、王莽の時代に体系化され、ようやく国の内外に浸透し始めたところでしたが、その後、初めての革命が生じたのです。しかも、漢は、曲りなりにも400年続いた王朝でした。曹丕も皇位に昇るにはかなりの勇気を要したことでしょう。曹丕は、献帝の禅譲を3度辞退した末に、受禅台を築いて登極しました(魏の文帝)。文帝は、洛陽に遷都し、劉氏の祖先は堯、曹氏の祖先は舜、との系図まで創作したのです(堯から舜への古の禅譲伝説をなぞろうとしたのでしょうか)。この皇位篡奪の形(禅譲)は、10世紀の宋の建国まで、延々と受け継がれることとなります。そして、漢帝より、禅譲の形を踏襲したことは、魏こそが正統王朝であるという正統論を生み出しました(漢の一族を標榜した[蜀]漢は、激しく反発しましたが)。この「天に二日なく地に二王なし」という正統論の系譜は、今日の中国と台湾の関係にまで、尾を引いているように思われます。また、五行説に従って、漢は、火徳(赤)の王朝とされていたので、魏は、土徳(黄)の王朝となりました。以下、宋・金に至るまで(あるいは、大元ウルスを除いて大清に至るまで)、晋(金徳、白)⇒[北]魏(水徳、黒)⇒[北]周(木徳、青)⇒隋(火徳、赤)と、この思想もまた受け継がれて行くこととなります。

220年、権力を握った文帝は、直ちに九品官人法を定めました。これは、まず中央の官位を9等に分類し(官品)、次に郡毎に中正官を置いて、郡内の人物を9等に評価させ(郷品)、官僚の登用を行おうとするものでした(郷品は4段階下の官品からスタートしました)。漢の官僚を魏に吸収するために創始されたこの制度は、地方豪族の子弟が最初に任官(起家)する際に適用され、貴族の門閥化を促進することになりました。この制度は、隋まで続くこととなります。中国では、以降、地方豪族(貴族、地主)、儒教的知識人、高級官僚の三位一体的存在が、新陳代謝を繰り返しながら、長く社会の支配層を形成することになるのです。文帝は、曹操の血を受け継いだ有能な合理主義者であり、厚葬を改めて、これまで、秦漢の皇族、王侯の葬礼に使われていた玉衣の使用を禁止しました。

3国の中では、北部を押さえた魏がずば抜けた強国でした(人口で呉の約2倍)。江南の地に拠った呉がそれに次ぎ(人口で[蜀]漢の約2倍)、[蜀]漢は、領土は小さかったものの、要害の地に恵まれ、雲南からインドに至る西南シルクロードを押さえ、孔明の他、関羽、張飛などの猛将を擁



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

して対抗したのです(関羽は、後に、商売の神、関帝として、孔子と並ぶほど有名な民間神となりました。関羽は、山西に生れたので、山西の塩商人と結び付けられたのでしょう。因みに、軍神としての関帝信仰を全国に広めたのは、大元ウルスの時代のモンゴル宮廷です)。孔明は、呉と結んで劉備の死後も魏に出兵し(北伐)、234年、魏の将軍、司馬懿と対陣中に、五丈原に没しました。北伐前に2代劉禪(後主)に提出した「出師の表」は名文の誉れが高いと言われています。しかし、蜀の人々から見れば、北伐は、所詮勝ち目のない戦争であり、徒に人命を弄ぶものに他なりませんでした。

呉は、孫堅、孫策父子が早死にしましたが、孫策の弟、孫権は、周瑜や魯肅(諸葛瑾や諸葛亮と同様、曹操に攻め落とされた徐州からの亡命者)といった名宰相にも恵まれ、外交の冴えを見せました。孫権は、海路、遼東の公孫氏(238年、魏によって滅亡。なお、公孫氏は、204年、楽浪郡を分割して、南に帯方郡を設置したことで知られています)と結び、南北と西([蜀]漢)から、魏を撃とうと考えていたようです。また、山越(百越の後裔)を討ち、海路、台湾や南海にも使者を派遣しました。仏教にも理解を示した孫権は、「海の中国」(海上交易路)を視野に納めたおそらく中国で最初の指導者だったと考えられています。孫権が夢想した海の中国は、これより、1000年後、クビライの時代に、大願成就することでしょう。呉は、江南の温暖な気候と肥沃な領土に支えられ、経済基盤はしっかりしていましたが、孫権亡き後は、豪族が台頭し、帝権は弱体化しました。

237年、魏の2代明帝は、暦を改正しました。暦には、夏暦(人統)商暦(地統)周暦(天統)の3統があり、王朝の交代があれば、改暦すべきだというのが儒教の教えであったのです。漢は、武帝以来、夏暦を用いていたので、明帝は商暦を採用しました(しかし、改暦は、日常生活上、不便なので、本格的な3統改暦を行ったのは、他には、始皇帝、王莽と武則天だけです)。

238年、倭の卑弥呼の使者が帯方郡に至り(その後洛陽に到着)、魏は、卑弥呼を親魏倭王として、金印紫綬・銅鏡100枚を授与しました(なお、卑弥呼については、固有名詞ではなく、王に近侍する巫女の「職名」である、との説があります)。親魏王という呼称は、魏の時代にしか現れない(儒教思想からすれば)破格のものです。このように対等に近い呼称を(周辺国に)与えた背景には、3国が覇権を争っていた特殊な時代背景が見て取れるように思われます(なお、わが国では、卑弥呼の遣使を239年と解する説が多いのですが、三国志が一貫している238年を覆す確証はありません。この記事は、三国志の魏書の最後の巻である「烏丸・鮮卑・東夷伝」の末の倭の項目に書かれています。わが国では、便宜的にこの項目を「魏志倭人伝」と呼んでいます)。

263年、魏は[蜀]漢を滅ぼしましたが、265年、魏の実力者、司馬炎が魏を滅ぼし、晋を建国しました。魏の皇帝は、曹操のDNAを受け継いで代々優秀でしたが、皇族を冷遇するなどして孤立したため、5代、45年で滅んだのです。280年、晋の大將軍杜預(歴史家としても著名)は「破竹の勢い」で呉を滅ぼし、約60年続いた三国志の時代に終止符を打ちました。なお、司馬氏が、3代4人がかりで魏の皇位篡奪を進めていた時代、竹林の7賢と呼ばれた人々が、浮世を逃れて、清談や



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

音楽を楽しみ、老荘の無為自然思想を実践したと云われています。リーダー格の阮籍が、俗人が訪ねてくると「白眼視」し、友人には青眼(普通の目つき)で歓待した故事はつとに有名です。また、清談が流行したこの時代には、五石散と呼ばれる鉱物性の幻覚剤も好んで用いられました。ここから、南北朝時代に流行した練丹術(ヨーロッパの錬金術とほぼ同じもの)が始まるのです。

目を北方に転じると、北匈奴の後、モンゴル高原の覇権を握ったのは、東胡の後裔の鮮卑(テュルク系あるいは、モンゴル・ツングース系)でした。2世紀の中頃、壇石槐(母親が天の雹を飲み込んで産まれたという北方遊牧民特有の天孫降臨伝説を持つ)という英傑が現れて、嘗ての匈奴に匹敵する大帝国を築いた鮮卑は、中国に侵入を繰り返しました。遊牧民は、自国の経済を安定させるため、一定量の農耕や交易を必要とします。中国侵入の目的は、単なる金品や穀物などの略奪ではなく農民や家畜の略取にあったのです。後に、北朝系の王朝が、徙民(しみん)と呼ばれる定住民の強制集団移住政策を行いますが、その淵源はここにあったのではないのでしょうか。3世紀に入ると、鮮卑には、別系統の軻比能というリーダーが現れ、善政を行ったので、戦乱に倦んだ中国人が、多数鮮卑の下に流入したと記録されています。しかし、235年、軻比能は、魏に暗殺され、鮮卑の勢力は弱体化しました。その後、モンゴル高原では、狼祖伝説を持つ高車(テュルク系)と柔然(東胡系あるいは匈奴系)が覇権を争うことになるのです。